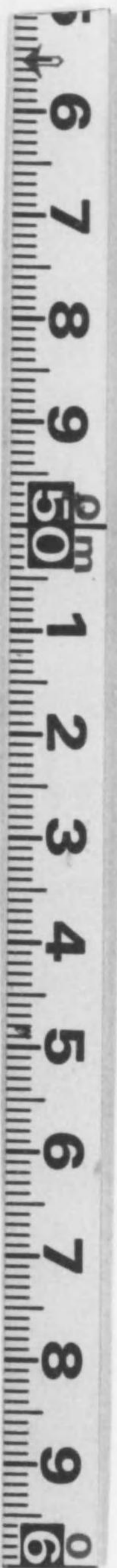


始



始

大御心

待 264
788



大御心

銳
一
郎
印



謹讀百遍

聖旨奉體

目次

大御心

扉題字

林 銑十郎閣下謹書

神勅

聖旨

扉題字

末次 信正閣下謹書

御誓祭 御誓文及ビ詔
教育ニ關スル勅語

戊申詔書	八
國民精神作興ノ詔書	一三
青少年學徒ニ下シ賜ハリタル勅語	一八
軍人に賜はりたる勅諭	二二

御集	扉題字	荒木貞夫閣下謹書
----	-----	----------

明治天皇御集	四
--------	---

獻唱	扉題字	木戸幸一閣下謹書
----	-----	----------

天長節	三九
-----	----

君が代	三一
勅語奉答	三二
紀元節	三五
明治節	三九
海ゆかば	四三
金剛石	四五
水は器	四七
愛國行進曲	四九
仰げば尊し	五五
螢の光	五八

神
勅

天壤無窮の神勅

豊葦原千五百秋の瑞穂國は、是れ吾が子孫の王たる可
き地なり。宜しく爾皇孫、就てまして治ろしめしたま
へ。行くましますせ。寶祚の隆えまさむこと、當に天壤

とともに無窮なるべきものぞ。

齋鏡齋穀の神勅

吾が兒、此の寶の鏡を視まさむこと、當に吾を視るが
猶くすべし。與に床を同じくし、殿を共にして、以て
齋の鏡と爲す可し。

吾が高天原に所御す齋庭の穂を以て、亦當に吾が兒に御せまつるべし。

天孫奉齋の神勅

吾は則ち、天津神籬及び天津磐境を起し樹てて、當に吾孫の爲めに齋ひ奉らむ。汝、天兒屋命・太玉命、宜しく天津神籬を持ちて、葦原の中國に降りて、亦吾孫

聖
と日

信正謹書

の爲めに齋ひ奉れ。

御誓祭ノ御誓文及ビ詔

- 一 廣クヒロク會議クワイギヲ興シ、萬機マンキ公論コウロンニ決スベシ。
- 一 上下シヤウカ心ココロヲ一イツニシテ、盛サカシニ經綸ケイリンヲ行フベシ。
- 一 官武クワンブ一途イツト庶民シヨミンニ至ル迄、各オノオノ其志ソノココロザシヲ遂トゲ、人心ジンシン

ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス。

一 舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クベシ。

一 智識ヲ世界ニ求め、大ニ皇基ヲ振起スベシ。

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ 朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ

天地神明ニ誓ヒ 大ニ斯國是ヲ定メ 萬民保全ノ道ヲ

立ントス 衆亦此旨趣ニ基キ 協心努力セヨ

明治元年三月十四日

教育ニ關スル勅語

朕^{チン}惟^{オモ}フニ、我^ワカ皇祖^{クワウソ}皇宗^{クワウソウ}、國^{クニ}ヲ肇^{ヘジ}ムルコト宏遠^{クワウエン}ニ、德^{トク}ヲ樹^クツルコト深厚^{シンコウ}ナリ。我^ワカ臣民^{シンミン}、克^クク忠^{チュウ}ニ、克^クク孝^{カウ}ニ、億兆^{イクテウ}心^{ココロ}ヲ一^{イツ}ニシテ、世^ヨ々[、]厥^ソノ美^ビヲ濟^ナセルハ、此^コレ

我^ワカ國體^{コクタイ}ノ精華^{セイカワ}ニシテ、教育^{ケウイク}ノ淵源^{エンゲン}、亦^{マタ}實^{ジツ}ニ此^{ココ}ニ存^ゾス。爾^{ナシ}臣民^{チンミン}、父^フ母^ボニ孝^{カウ}ニ、兄^{ケイ}弟^{テイ}ニ友^{ユウ}ニ、夫^{フウ}婦^フ相^{アヒ}和^ワシ、朋^{ホウ}友^{ユウ}相^{アヒ}信^{シン}シ、恭^{キヨウ}儉^{ケン}己^{コノ}レヲ持^チシ、博^{ハク}愛^{アイ}衆^{シュウ}ニ及^{オヨ}ホシ、學^{ガク}ヲ修^{シュウ}メ業^ゲヲ習^{ナラ}ヒ、以^{モツ}テ智^チ能^{ノウ}ヲ啓^{ケイ}發^{ハツ}シ、德^{トク}器^キヲ成^{セイ}就^{ジュ}シ、進^ステ公益^{コウエキ}ヲ廣^{ヒロ}メ、世^{セイ}務^ムヲ開^{ヒラ}キ、常^{ツネ}ニ國憲^{コクケン}ヲ重^{オモ}シ、國法^{コクハフ}ニ遵^{シタガ}ヒ、一旦^{イツタン}緩急^{クワンキツ}アレハ、義勇^{ギユウ}公^{コウ}ニ奉^{ホウ}シ、以^{モツ}テ天壤^{テンジヤウ}無窮^{ムキウ}ノ

皇運ヲ扶翼スヘシ。是ノ如キハ、獨リ朕カ忠良ノ臣民
タルノミナラス、又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足
ラン。

斯ノ道ハ、實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ、子孫臣民
ノ俱ニ遵守スヘキ所、之ヲ古今ニ通シテ謬ラス、之ヲ
中外ニ施シテ悖ラス、朕、爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ

咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ。

明治二十三年十月三十日

戊申詔書

朕惟フニ、方今人文日ニ就リ、月ニ將ミ、東西相倚リ
彼此相濟シ、以テ其ノ福利ヲ共ニス。朕ハ、爰ニ益々
國交ヲ修メ、友義ヲ惇シ、列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴

ラムコトヲ期ス。願ミルニ、日進ノ大勢ニ伴ヒ、文明
ノ惠澤ヲ共ニセントスル、固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ。
戦後日尙淺ク、庶政益々更張ヲ要ス。宜ク上下心ヲ一
ニシ、忠實業ニ服シ、勤儉産ヲ治メ、惟レ信、惟レ義、
醇厚俗ヲ成シ、華ヲ去リ實ニ就キ、荒怠相誡メ、自彊
息マサルヘシ。

抑ソモク我ワカ神シ聖セイナル祖ソ宗ゾウノ遺キ訓クント、我ワカ光クワウ輝キアル國コク史シノ
成セイ跡セキトハ、炳ヘイトシテ日ジツ星セイノ如ゴトシ。寔マコトニ克コクク恪カク守シユシ 淬サ
礪レイノ誠マコトヲ輸イクサハ、國コク運ウン發ハツ展テンノ本モト、近チカク斯ココニ在アリリ。朕チンハ
方ハウ近コンノ世セイ局キョクニ處シヨシ、我ワカ忠チュウ良リヤウナル臣シン民ミンノ協ケフ翼ヨクニ倚イ藉シヤクシ
テ、維キ新シンノ皇クワウ猷イウヲ恢クワイ弘コウシ、祖ソ宗ゾウノ威キ德トクヲ對タイ揚ヤウセムコト
ヲ庶コヒ幾ホガフ。爾ナン臣ヂン民ミン、其ソレ克コクク朕チンカ旨ムネヲ體タイセヨ。

明治四十一年十月十三日

國民精神作興ノ詔書

朕^{チン}惟^{イモ}フニ、國家^{コクカ}興隆^{コウリユウ}ノ本^{モト}ハ、國民^{コクミン}精神^{セイシン}ノ剛健^{ガウケン}ニ在^アリ。
之^{コレ}ヲ涵養^{カンヤウ}シ、之^{コレ}ヲ振作^{シンサク}シテ、以^{モッ}テ國本^{コクホン}ヲ固^{カタ}クセサルヘ
カラス。是^{コレ}ヲ以^{モッ}テ、先帝^{センダイ}、意^イヲ教育^{ケウイク}ニ留^{トド}メサセラレ、

國體^{コクタイ}ニ基^{モト}キ、淵源^{エンゲン}ニ遡^{サカノボ}リ、皇祖^{クワウソ}皇宗^{クワウソウ}ノ遺訓^{イケン}ヲ揭^{カカ}ケテ、
其^{ソノ}ノ大綱^{タイカウ}ヲ昭示^{セウシ}シタマヒ、後^{ノチ}又^{マタ}臣民^{シンミン}ニ詔^{ミコトノリ}シテ、忠實^{チュウジツ}勤^{キン}
儉^{ケン}ヲ勸^{スス}メ、信義^{シンギ}ノ訓^{ワシヘ}ヲ申^{カサ}ネテ、荒怠^{クワウタイ}ノ誠^{イマシメ}ヲ垂^クレタマヘ
リ。是^{コレ}レ皆^{ミナ}道德^{ダクタク}ヲ尊重^{ソンチヨウ}シテ、國民^{コクミン}精神^{セイシン}ヲ涵養^{カンヤウ}振作^{シンサク}スル
所以^{ユエニ}ノ洪謨^{コウボ}ニ非^{アラ}サルナシ。爾^ジ來^{ライ}趨向^{スウカウ}一定^{イツテイ}シテ、効果^{カウカ}大^{オホ}
ニ著^{アラハ}レ、以^{モッ}テ國家^{コクカ}ノ興隆^{コウリユウ}ヲ致^{イタ}セリ。朕^{チン}、卽位^{ソクキイ}以來^{ライ}、夙^{ソク}

夜兢兢トシテ、常ニ詔述ヲ思ヒシニ、俄ニ災變ニ遭ヒテ、憂悚交々ニ至レリ。

輓近學術益々開ケ、人智日ニ進ム。然レトモ、浮華放縱ノ習漸ク萌シ、輕佻詭激ノ風モ亦生ス。今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ、或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル。況ヤ今次ノ災禍、甚タ大ニシテ、文化ノ紹復、國力ノ

振興ハ、皆國民ノ精神ニ待ツヲヤ。是レ實ニ上下協戮振作更張ノ時ナリ。振作更張ノ道ハ他ナシ、先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ、其ノ實效ヲ舉クルニ在ルノミ。宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ、智德ノ竝進ヲ努メ、綱紀ヲ肅正シ、風俗ヲ匡勵シ、浮華放縱ヲ斥ケテ、質實剛健ニ趨キ、輕佻詭激ヲ矯メテ、醇厚中正ニ歸シ、人倫ヲ明ニシ

テ、親和ヲ致シ、公德ヲ守リテ、秩序ヲ保チ、責任ヲ
重シ、節制ヲ尙ヒ、忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ、博愛共存ノ
誼ヲ篤クシ、入リテハ恭儉勤敏、業ニ服シ産ヲ治メ、
出テテハ一己ノ利害ニ偏セスシテ、力ヲ公益世務ニ竭
シ、以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮、社會ノ福祉トヲ圖
ルヘシ。朕ハ、臣民ノ協翼ニ頼リテ、彌々國本ヲ固ク

シ、以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ。爾臣民、其レ之
ヲ勉メヨ。

大正十二年十一月十日

青少年學徒ニ下シ賜ハリタル勅語

國本ニ培ヒ、國力ヲ養ヒ、以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル、任タル極メテ重ク、道タル甚ダ遠シ。而シテ其ノ任、實ニ繋リテ汝等青少年學徒ノ雙肩

ニ在リ。汝等其レ氣節ヲ尙ビ廉恥ヲ重ンジ、古今ノ史實ニ稽ヘ、中外ノ事勢ニ鑒ミ、其ノ思索ヲ精ニシ、其ノ識見ヲ長ジ、執ル所中ヲ失ハズ、嚮フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ恪守シ、文ヲ修メ、武ヲ練リ、質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ、以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ。

昭和十四年五月二十二日

軍人に賜はりたる勅諭

我國の軍隊は、世々天皇の統率し給ふ所にそある。昔
神武天皇、躬つから大伴・物部の兵ともを率ゐ、中國
のまつろはぬものともを討ち平け給ひ、高御座に即か

せられて、天下しろしめし給ひしより、二千五百有餘
年を経ぬ。此間、世の様の移り換るに随ひて、兵制の
沿革も又屢なりき。古は天皇躬つから軍隊を率ゐ給ふ
御制にて、時ありては皇后・皇太子の代らせ給ふこと
もありつれと、大凡、兵權を臣下に委ね給ふことはな
かりき。中世に至りて、文武の制度、皆唐國風に倣は

せ給ひ、六衛府を置き、左右馬寮を建て、防人など設
けられしかは、兵制は整ひたれとも、打續ける昇平に
狃れて、朝廷の政務も漸文弱に流れければ、兵、農お
のつから二に分れ、古の徵兵は、いつとなく壯兵の姿
に變り、遂に武士となり、兵馬の權は、一向に其武士
どもの棟梁たる者に歸し、世の亂と共に、政治の大權

も亦其の手に落ち、凡七百年の間、武家の政治とはな
りぬ。世の様の移り換りて斯なれるは、人力もて挽回
すへきにあらずとはいひなから、且は我國體に戻り、
且は我祖宗の御制に背き奉り、淺間しき次第なりき。
降りて、弘化・嘉永の頃より、徳川の幕府、其政衰
へ、剩外國の事とも起りて、其侮をも受けぬへき勢

に迫りければ、朕か皇祖仁孝天皇、皇考孝明天皇、い
たく宸襟を惱し給ひしこそ、忝くも又惶けれ。然る
に朕幼くして、天津日嗣を受けし初、征夷大將軍、其
政權を返上し、大名小名、其版籍を奉還し、年を経ず
して、海内一統の世となり、古の制度に復しぬ。是文
武の忠臣良弼ありて、朕を補翼せる功績なり。歴世祖

宗の、專蒼生を憐み給ひし御遺澤なりといへとも、併
我臣民の、其心に順逆の理を辨へ、大義の重きを知れ
るか故にこそあれ。されは此時に於て、兵制を更め、
我國の光を耀さむと思ひ、此十五年か程に、陸海軍の
制をは、今の様に建定めぬ。夫兵馬の大權は、朕か統
ふる所なれば、其司々をこそ臣下には任すなれ、其大

綱は、朕、親之を攬り、肯て臣下に委ぬへきものにあ
らす。子々孫々に至るまで、篤く斯旨を傳へ、天子は
文武の大權を掌握するの義を存して、再中世以降の如
き失態なからんことを望むなり。朕は、汝等軍人の大
元帥なるそ。されは朕は、汝等を股肱と頼み、汝等は
朕を頭首と仰きてこそ、其親は特に深かるへき。朕か

國家を保護して、上天の恵に應じ、祖宗の恩に報い
みらする事を得るも得ざるも、汝等軍人か其職を盡す
と盡ささるとに由るそかし。我國の稜威振はさること
あらは、汝等能く朕と其憂を共にせよ。我武維揚りて
其榮を耀かさは、朕、汝等と其譽を偕にすへし。汝等
皆其職を守り、朕と一心になりて、力を國家の保護に

盡さは、我國の蒼生は、永く太平の福を受け、我國の
威烈は、大に世界の光華ともなりぬへし。朕、斯も深
く汝等軍人に望むなれば、猶訓諭すへき事こそあれ。
いてや、之を左に述へむ。

一、軍人は忠節を盡すを本分とすへし。凡生を我國に
稟くるもの、誰かは國に報ゆるの心なかるへき。況

して軍人たらん者は、此心の固からては、物の用に
立ち得へしとも思はれず。軍人にして、報國の心堅
固ならざるは、如何程技藝に熟し、學術に長するも
猶偶人にひとしかるへし。其隊伍も整ひ、節制も正
しくとも、忠節を存せざる軍隊は、事に臨みて烏合
の衆に同かるへし。抑國家を保護し、國權を維持す

るは、兵力に在れば、兵力の消長は、是國運の盛衰
なることを辨へ、世論に惑はず、政治に拘らす、
只々一途に、己か本分の忠節を守り、義は山嶽より
も重く、死は鴻毛よりも軽しと覺悟せよ。其操を破
りて、不覺を取り、汚名を受くるなかれ。

一、軍人は禮義を正しくすへし。凡軍人には、上元帥

より下一卒に至るまで、其間に官職の階級ありて、
統屬するのみならず、同列同級とて、停年に新舊
あれは、新任の者は、舊任のものに服従すへきもの
そ。下級のものは、上官の命を承ること、實は直
に朕か命を承る義なりと心得よ。己か隸屬する所
にあらすとも、上級の者は勿論、停年の己より舊き

ものに對しては、總て敬禮を盡すへし。又上級の者
は、下級のものに向ひ、聊も輕侮驕傲の振舞あるへ
からす。公務の爲に威嚴を主とする時は格別なれと
も、其外は務めて懇に取扱ひ、慈愛を專一と心掛、
上下一致して王事に勤勞せよ。若し軍人たるものに
して、禮儀を紊り、上を敬はす下を惠ますして、一

致の和諧を失ひたらんには、營に軍隊の蠱毒たるの
みかは、國家のためにも、ゆるし難き罪人なるへし。
一、軍人は武勇を尙ふへし。夫武勇は、我國にては古
よりいとも貴へる所なれば、我國の臣民たらむもの
武勇なくては叶ふまし。況して軍人は、戦に臨み敵
に當るの職なれば、片時も、武勇を忘れてよかるへ

きか。さはあれ武勇には大勇あり、小勇ありて、同
からず。血氣にはやり粗暴の振舞なとせむは、武勇
とは謂ひ難し。軍人たらんものは、常に能く義理を
辨へ、能く膽力を練り、思慮を殫して事を謀るへし。
小敵たりとも侮らす、大敵たりとも懼れず、己か武
職を盡さむこそ、誠の大勇にはあれ。されは武勇を

尙ふものは、常々人に接るには、溫和を第一とし、
諸人の愛敬を得むと心掛けよ。由なき勇を好みて、
猛威を振ひたらは、果は世人も忌嫌ひて、豺狼なと
の如く思ひなむ。心すへきことにこそ。

一、軍人は信義を重んずへし。凡信義を守ること、常
の道にはあれと、わきて軍人は、信義なくては一日

も隊伍の中に交りてあらむこと難かるへし。信とは
己か言を踐行ひ、義とは己か分を盡すをいふなり。

されは信義を盡さむと思はは、始より其事の成し得
へきか得へからさるかを、審に思考すへし。臆氣
なる事を假初に諾ひて、よしなき關係を結ひ、後に
至りて信義を立てんとすれば、進退谷りて身の措き

所に苦むことあり。悔ゆとも其詮なし。始めに能々
事の順逆を辨へ、理非を考へ、其言は所詮踐むへか
らすと知り、其義はとても守るへからすと悟りなは
速に止るこそよけれ。古より或は小節の信義を立て
んとて、大綱の順逆を誤り、或は公道の理非に踏迷
ひて、私情の信義を守り、あたは英雄豪傑ともか、

禍に遭ひ身を滅し、屍の上の汚名を、後世まで遺せ
ること、其例尠からぬものを、深く警めてやはある
へき。

一、軍人は質素を旨とすへし。凡質素を旨とせされは
文弱に流れ輕薄に趨り、驕奢華靡の風を好み、遂に
は貧汚に陥りて、志も無下に賤くなり、節操も武勇

も其甲斐なく、世人に爪はしきせらるる迄に至りぬ
へし。其身生涯の不幸なりといふも、中々愚なり。
此風一たひ軍人の間に起りては、彼の傳染病の如く
蔓延し、士風も兵氣も頓に衰へぬへきこと明なり。
朕深く、之を懼れて、曩に免黜條例を施行し、略此
事を誠め置きつれと、猶も其惡習の出んことを憂ひ

て、心安からねは、故に又之を訓ふるそかし。汝等
軍人、ゆめ此訓誠を等閑にな思ひそ。

右の五ヶ條は、軍人たらんもの、暫も忽にすへからず。
さて之を行はんには、一の誠心こそ大切なれ。抑此
五ヶ條は、我軍人の精神にして、一の誠心は、又五ヶ
條の精神なり。心誠ならされは、如何なる嘉言も善行

も、皆うはへの裝飾にて、何の用にかは立つへき。心
たに誠あれは、何事も成るものそかし。況してや、此
五ヶ條は、天地の公道、人倫の常經なり。行ひ易く守
り易し。汝等軍人、能く朕か訓に遵ひて、此道を守り
行ひ、國に報ゆるの務を盡さは、日本國の蒼生、舉り
て之を悦ひなむ。朕一人の懌のみならむや。

明治十五年一月四日

御集

貞夫謹書

明治天皇御集

人もわれも道を守りてかはらずば
この敷島の國はう

ごかし

いにしへのふみ見るたびに思ふかな おのがをさむる
國はいかにと

あらたまの年もかはりぬ今日よりは 民のこゝろやい
とゞひらけむ

埋火をかきおこしつゝつくぐと 世のありさまを思
ふよはかな

うゑおきし庭のくれ竹よゝをへて かはらぬ色のたの
もしきかな

もろ人ひとと共にともかざむむいく秋あきも まがきにに匂におへしら菊きく
の花はな

いさみたつ駒こまにうちうちのり吹上ふきあげの にはにの雪見ゆきみにいでし
けさかな

富士ふじのねもはるかに見みえてあしたづの たちまふ空そらぞ
のどけかりける

みな人ひともまちわたるらむ我園わがそのに うゑたる菊きくの花はなのさ
かりを

さゞれ石いしの巖いはとならむ末すえまでも
五十鈴いすずの川かはの水みづはに
ごらじ

千早ちはやぶる神かみぞ知るらむ民たみのため
世よをやすかれと祈いのる

心こころは

とこしへに民たみやすかれといのるなる
わがよをまもれ

伊勢いせのおほかみ

すめがみの廣ひろ前まへてらす月つきかげに
神樂かぐらのこゑもすみま

さりつゝ

散りやすきうらみはいはじいく春も かはらでにほへ

山ざくら花

心にもかゝる雲なきこの秋の もなかの月のかげのさ

やけさ

天の下にぎはふ世こそたのしけれ 山のおくまで道の

ひらけて

わが國の櫻のかげに咲きいでゝ 色こそはえねから

もゝの花

あきらけき月にむかへば久方の空もしたしくおもほ
ゆるかな

子わかれの松のしづくに袖ぬれて 昔をしのぶさくら
みの里

松風のおとのみきよて年も経ぬ いつかゆきみむ天の
はしだて

民のため年ある秋をいのる身は たへぬあつさも厭は
ざりけり

ちはやぶる神のこゝろを心にて わが國民を治めてし
がな

たかどのゝ内もあつさにたへぬ日に しづがふせやを
思ひこそやれ

世をおもふ心の雲もうちはれて こよひさやけき月を
みるかな

ゆたかなる年の初穂をさゝげつゝ しづもあがたの神
祭るらむ

埋火うらみびにむかへど寒さむしふる雪ゆきの　したにうもれし人ひとを思おも
へば

くにたみのつらなる道みちをかつみつゝ　旅たびにいづるがた
のしかりけり

國民こくにたのおくりむかへて行くところ　さびしさ知らぬ鄙びな
の長ながみち

心こころゆく旅路たびぢなりけり大空おほぞらに　はれたるふじの山やまもみえ

のる人ひとの心こころをはやくしる駒こまは ものいふよりもあはれ
なりけり

勇いさみたつ駒こまをひかへて進すすめてふ 聲こゑやまつらむつはも
のゝとも

さまぐの書かみのつどひてけふもまた 机つくえのうへのせば
くなりぬる

曉あけのねざめしづかに思おもふかな わがまつりごといかゞ
あらむと

あた波なみをふせぎし人ひとはみなと川がは 神かみとなりてぞ世よを守まも
るらむ

神垣かみがきのみしめゆらぎて加茂山かものやまの 松まつの梢こずえにあさかぜぞ
吹ふく

やすからむ世よをこそいのれ天あまつ神かみ くにつ社やしろに幣ぬさをた
むけて

ちはやぶる神かみのまもりによりてこそ わが葦原あしはらのくに
はやすけれ

千萬の神もひとつにまもるらむ
青人草のしげりゆく
世を

千早ぶる神のひらきし敷島の
道はさかえむ萬代まで
に

つはものと共に野山をわけてみむ
手馴の駒にくらを
おかせて

梓弓やしまのほかも波風の
しづかなる世をわがいの
るかな

のどかなる春にあひたる國民は
おなじ心に花や見る
らむ

あかずして月みる窓をとざしけり
寒くなりぬと人に
いはれて

豊年の新嘗祭ことなくて
つかふる今日ぞうれしかり
ける

千早ぶる神のひらきし道をまた
ひらくは人のちから
なりけり

器うつはにはしたがひながらいはがねも　とほすは水みづのちか
らなりけり

わがために汲くみつときゝし祐すけの井いの　水みづはいまなほな
つかしきかな

老人おきなのかたりしことをさらにまた　思おもひぞいづるふる
里さとにきて

草くさまくら旅たびにいでゝは思おもふかな　民たみのなりはひさまた
げむかと

まぢかくもたづねし民たみのなりはひを　こよひ旅たびねの夢ゆめ
にみしかな

小車せくらまのあとさき守まもるますらをの　駒こまもつかれむ鄙ひなの長なが
みち

うもれ木きをみるにつけても思おもふかな　しづめるまゝの
人ひともありやと

とし高たかき人ひとにさづくる盃さかずきは　手てにとるごとにうれしか
りけり

ともし火の影まばらにもみゆるかな 人すむべくもあ
らぬ山邊に

千早ぶる神のかためしわが國を 民と共に守らざら
めや

ひとり身をかへりみるかなまつりごと たすくる人は
あまたあれども

ひさかたの空吹く風よひとみな の 心のちりを拂ひす
てなむ

老の坂こえぬる子をもをさなしと 思ふやおやのこゝ
ろなるらむ

すなほにもおほしたてなむいづれにも かたぶきやす
き庭のわか竹

もてあそび手にとらすれば幼子が うちゑむ顔のうつ
くしきかな

もろともにしたすけかはしてむつびあふ 友ぞ世にたつ
力なるべき

わらはべがまなびの道のゆるし文 さづくる人もうれ
しかるらむ

文みれば昔にあへることちして 涙もよほす時もあり
けり

をりくにおもひぞいづる國のため 心くだきし人の
むかしを

はるかにもあふがぬ日なしわが國の しづめとたてる

伊勢のかみ垣

わがこゝろおよばぬ國くにのはてまでも　よるひる神かみは守まも
りますらむ

つはものゝ駒こまの足音あしなぞきこゆなる　旅たびだちまうけとゝ
のひぬらし

勇いさみたつこまをひかへてますらは　わが小車せぐるまのいづ
るまちけむ

ことしげき世よにふる人ひともわがこのむ　道みちにわけいるひ
まはありけり

民のため心のやすむ時ぞなき 身は九重の内このへにありて
も

天てらす神のみいつを仰ぐかな ひらけゆく世にあふ
につけても

神風の伊勢の宮居の事をまづ 今年も物の始はじめにぞきく

あしはらの國くにのさかえを祈るかな 神代かみよながらのとし
をむかへて

春雨はるさめのふるにつけても民草たみくさの
うるほはむ世よをまづ思おも
ふかな

子こを思おもふきゝすの聲こゑをあはれとは
狩かをたのしむ人ひとも
きくらむ

戦たかひのにはに立つ身みをいかにぞと
思おもへば花はなもみるこゝ
ちせず

吹上ふきあのそのふの花はなをいかにぞと
問とふ日ひもなくて春はるの
くれゆく

世の爲にも思ふ時は庭にさく
花も心にとまらざり
けり

思ふ事たえぬ今年は春の夜も
ねざめがちにてあかし
けるかな

事繁き世にも似たるか夏草は
拂ふあとよりおひ茂り

つゝ

年々におもひやれども山水を
汲みて遊ばむ夏なかり
けり

早苗さなことるしづが菅笠すげがさいにしへの 手てぶりおぼえてなつ
かしきかな

暑あつしともいはれざりけりにえかへる 水田みづたにたてるし
づを思おもへば

ゆく人ひとを妨さまたげざらばたちとまり 見みてましものを野邊のべ
の秋萩あきはぎ

九重ここのへの庭にほの白菊しらぎくたをらせて 宴うたげにもれし人ひとにおくらむ

すめ神がみにはつほさゝげて國民くたうと 共に年としある秋あきを祝いはは

む

あさみどり澄すみわたりたる大空おほぞらの 廣ひろきをおのが心こころと

もがな

事こと有あるにつけていよく思おもふかな 民たみのかまどの煙けいりい

かにと

つもりなば拂はらふ方かたなくなりぬべし 塵ちりばかりなる事ことと

おもへど

ねざめせしこの曉あけぼののころもて しづかにものを思おもひ

定さだめむ

起おき出いで、思おもふ事ことなきあしたこそ をさな心こころにひとし

かりけれ

おほぞらにそびえて見みゆるたかねにも 登のぼればのぼる
道みちはありけり

遠とほくとも人ひとのゆくべき道みちゆかば 危あやき事ことはあらじとぞ

思おもふ

ひらくれば開くるまゝに思ふかな あらぬ道にや人の
いらむと

仇波のしづまりはてゝ四方のうみ のどかにならむ世
をいのるかな

ちはやぶる神の御代よりうけつげる 國をおろそかに
守るべしやは

しづがすむわらやのさまを見てぞ思ふ 雨風あらしき時
はいかにと

なかくく^くにみやびすくなしあまりにも 作りすぎたる
庭のけしきは

故郷を遠くはなれてゆく人は ともなふひとや力なる
らむ

いぶせしと思ふなかにもえらびなば くすりとならむ
草もあるべし

苔むせるいはねの松の萬代も うごきなき世は神ぞも
るらむ

國のためながれと思ふ老人に
しなぬ薬をさづけて
しかな

心ある人のいさめのことはは
病なき身の薬なりけ
り

文字をのみよみならひつゝ讀む書の
心をえたる人ぞ
すくなき

天地もうごかすばかり言の葉の
まことの道をきはめ
てしかな

ますらをに旗をさづけていのるかな 日の本の名を
かゞやかすべく

しきしまの大和心をみがくずば 劍おぶともかひな
らまし

あしはらの國とまさむとおもふにも 青人草ぞたから
なりける

つたへきて國のたからとなりけり 聖のみよのみこ
とのりぶみ

國くにといふくにのかゞみとなるばかり　みがけますらを
大和やまとだましひ

くもりなく世よをたもてとて千早ちはやぶる　神かみのさづけし鏡かき
なるらむ

榊葉さかきはにかくる鏡かきをかゞみにて　人ひともこゝろをみがけと
ぞ思おもふ

しづかにも世よのをさまりてよろこびの　盃さかづきあげむ時ときぞ
またるゝ

よもの海^{うみ}みなはらからと思^{おも}ふ世^よに など波^{なみ}風^{かぜ}のたちさ
わぐらむ

かみつよの聖^{ひじり}のみよのあとゝめて わが葦^{あし}原^{はら}の國^{くに}はを
さめむ

まつりごとたゞしき國^{くに}といはれなむ もゝのつかさよ
ちから盡^{つく}して

山^{やま}のおく島^{しま}のはてまで尋^{たづ}ねみむ 世^よにしられざる人^{ひと}も
ありやと

照るにつけくもるにつけて思ふかな わが民草のうへ
はいかにと

民草のうへやすかれといのる世に 思はぬことのおこ
りけるかな

よの中はたかきいやしきほどくに 身を盡すこそつ
とめなりけれ

國をおもふみちにふたつはなかりけり 軍の場にたつ
もたゝぬも

民草たみくさのうへに心こころをそゝぐかな 雨あめしづかなるよはの寝ね

覺さに

白雲しらくものよそに求もとむな世よの人の まことの道みちぞしきしま

の道みち

なにごとに思おもひ入いるとも人ひとはたゞ まことの道みちをふむ
べかりけり

かりそめの言ことの葉草はくさもともすれば ものの根ねざしとな

る世よなりけり

きずなきはすくなかりけり世の中に
もてはやさるゝ
玉といへども

かくばかりことしげき世にたへぬべき
人をえたるが
うれしかりけり

世の中の事ある時にあひてこそ
ひとの力はあらはれ
にけれ

ほどくゝにたつべき道もあるものを
老いにけりとて
身をなかこちそ

世の中よのつとめをさくる老人おきなも 國くにのためにはもの思おも
ふらむ

くりかへす昔むかしがたりにおのづから いさめことばのま

じる老人おきな

ひとりたつ身みになりぬともおほしたてし 親おやの恵あはれをわ
すれさらなむ

國くにの爲ためたふれし人ひとを惜おしむにも 思おもふはおやのこゝろな
りけり

ほどくくにこころをつくす國民の
ちからぞやがてわ
が力なる

むらぎもの心をたねのをしへ草
おひしげらせよ大和
しまねに

あらはさむときはきにけりますらが
ときし劍の清
き光を

よとも語りつたへよ國のため
命をすてし人のい
さをを

事しげき世にたゝぬまに人は皆まなびの道に勵めと
ぞ思ふ

ちかひたるおのが心をしをりにて 誠の道をわけつく
してむ

しきしまの大和心のをしさは ことある時ぞあらは
れにける

山をぬく人のちからも敷島の 大和心ぞもとるなるべ
き

かざらむと思はざりせばなかくくに　うるはしからむ
人のこゝろは

116

今も世にあらばと思ふ人をしも　この曉の夢に見しか
な

たらちねのみおやの御代の昔をも　ことある毎に語り
いでつゝ

117

思ふことつらぬかむ世はいつならむ　射る矢のごとく
すぐる月日に

神垣に朝まゐりしていのるかな 國と民とのやすから
む世を

國民はひとつ心にまもりけり 遠つみおやの神のをし
へを

かみかぜの伊勢の内外的みやばしら 動かぬ國のしづ
めにぞたつ

ちはやぶる神の御代よりひとすぢの 道をふむこそう
れしかりけれ

かしの實みのひとつ心こころに萬民よろづたみ まもるがうれし蘆原あしはらのく
に

120

檣原かしはらの宮みやのおきてにもとづきて わが日本ひのもとの國くにをたも
たむ

國くにのためあたなす仇あだはくたくとも いつくしむべき事こと
な忘れそ

121

ことのはにあまる誠まことはおのづから 人ひとのおもわにあら
はれにけり

世の中よの人の司つかさどとなる人ひとの 身みのおこなひよたゞしか
らなむ

思おもふこと貫つらぬかむ世よをまつほどの 月つき日は長ながきものにぞ
ありける

すゝむべき時ときをはかりて進すすまずば 危あやふき道みちにいりもこ
そすれ

いかならむ事ことにあひてもたわまぬは わがしきしまの
大和やまとだましひ

はからずも夜をふかしけりくにのため 命をすてし人
をかぞへて

くのために心も身をもくだきつる 人のいさををたづ
ねもらすな

なりはひはよしかはるとも國民の 同じころに世を
守らなむ

國民のひとつごころにつかふるも みおやの神のみめ
ぐみにして

いちはやく進すすまむよりも怠おこたるな まなびの道みちにたてる
わらはべ

家いへ富ふみてあかぬことなき身みなりとも 人ひとのつとめにお
こたるなゆめ

いにしへの御み代よの教きょうにもとづきて ひらけゆく世よに
たゝむとぞ思おもふ

さわがしき風かぜにつけても外ちが國くにに いでゝ世よ渡わたる民たみをこ
そおもへ

さまざまのうきふしをへて吳竹のよにすぐれたる人
とこそなれ

128

ことしげき世にはあれども國民を教ふる道に心たゆ
むな

霜ふみて撞くらむ人の寒ささへ思ひやらるゝ鐘のお
とかな

129

たらちねのみおやの宮にをさなくて見しよこひしき
月のかげかな

人みなのおどろきがほに惜むかな にはかにくるゝ年
ならなくに

曉のねざめのところにおもふこと 國と民とのうへのみ
にして

しるべする人をたよりにわけいらば いかなる道かふ
み迷ふべき

踏み分くるひとなかりせば末つひに わかずやならむ
ちよのふる道

手^てならひをものうきことに思^{おも}ひつる　をさな心^{こころ}をいま
くゆるかな

くもりなき朝日^{あさひ}のはたにあまてらす　神^{かみ}のみいつをあ

ふげ國民^{くにとたみ}

いそしみてますく船^{ふね}はつくらなむ　海^{うみ}をめぐらす國^{くに}
のかために

末^{すえ}つひにならざらめやは國^{くに}のため　民^{たみ}のためにとわが

おもふこと

ゆくすゑはいかになるかと曉あきつの
ねざめくくくに世よをお
もふかな

世よの中なかのことまだしらぬうなる子こも
時ときに合あひたる遊あそび
をぞする

國くにの爲ためいよくはげめちよろづの
民たみもこゝろをひと
つにはして

ちはやぶる神かみのをしへをうけつぎて
人ひとのこゝろぞ
たゞしかりける

世の中の風にこゝろをさわがすな まなびの窓にこも
るわらはべ

おこたらず學びおほせていにしへの 人にはちぎる人
とならなむ

すなほなるをさな心をいつとなく 忘れはつるが惜し
くもあるかな

しのびでもあるべき時にともすれば あやまつものは
心なりけり

さまぐゝのことにあたりて思ふかな 國ひらかしゝ御
代のみいつを

神路山みねのまさかきこの秋は 手づからをりて捧げ
まつらむ

しげりあふ杉の林をかこひにて ちりにけがれぬ神の
ひろまへ

世の中にことあるときぞしられける 神のまもりのお
ろかならぬは

うけつぎて守るもうれし千早ぶる 神のさだめしうら

やすの國

民草のしげりそふこそ葦原の 國のさかゆくもとるな
りけれ

國民のうへやすかれとおもふのみ わが世にたえぬ思
なりけり

おのづから仇のころも靡くまで 誠の道をふめや國

民

ともしびをさしかふるまで軍人 おこせしふみをよみ
みづるかな

思ふことつらぬかずしてやまぬこそ 大和をのこの
こゝろなりけれ

國の爲いのちをすてしものゝふの 魂や鏡にいまうつ
るらむ

久方のあめにのぼれるこゝちして いすゞの宮にまる
るけふかな

つくづくと思ふにつけて尊きは とほつみおやの御稜
威なりけり

こゝろざす方こそかはれ國を思ふ 民の誠はひとつな
るらむ

世の中の事ある時にあひぬとも おのがつとめむわざ
な忘れそ

ひらけゆく世のさま見ればなかくくに 昔にかへるこ
ともありけり

さまぐくにももの思ひこしふたとせは あまたの年を経
しこちする

しきしまのやまと撫子も草の花にまさりていつく
しきかな

國のためうせにし人を思ふかな くれゆく秋の空をな
がめて

ひろくなり狭くなりつゝ神代より たえせぬものは敷

島の道

近きよりゆかむとしてはなかくくに 遠くぞまよふ世
の中のみち

ちはやぶる神の心にかなふべく をさめてしがな葦原
のくに

餌をまきていざあさらせむわが庭に けふも小鳥のな
れて遊べる

ゆみやもて神のをさめしわが國に うまれしをのこ心
ゆるぶな

いさゝかのきずなき玉もともすれば ちりに光を失ひ
にけり

靖國のやしろにいつくかゞみこそ やまと心のひかり
なりけれ

よもの海なみしづかなる時にだに なほ思ふことある
世なりけり

ものをだにまだいはぬ子も萬代と よばへばやがて手
をあげにけり

いかならむときにあふとも人はみな 誠の道をふめと
をしへよ

つくろはむことまだしらぬうなる子の もとの心のう
せずもあらなむ

世の人にまさる力はあらずとも 心にはづることなか
らなむ

日本の國の光のそひゆくも 神の御稜威によりてな
りけり

國民くわんたみのうへやすかれと思おもふにも　いのるは神かみのまもり
なりけり

154

かみかぜの伊勢いせの宮居みやかを拜まがみての　後のちこそきかめ朝あさま
つりごと

たひらかに世よはなりぬとて敷島しらしまの　大和心やまとこころよ撓たふまざら
なむ

155

うたはせてきくぞたのしき國民くわんたみの　言ことの葉はひろくめし
あつめつゝ

いつくしとめづるあまりに撫子の庭のをしへをおろ
そかにすな

歲月は射る矢のごとしものはみな すみやかにこそな
すべかりけれ

人みなひとの惜む心こころはしりながら かぎりある世よと花はなのち
るらむ

おのがじゅつとめを終へし後にこそ 花はなの陰かげにはたつ
べかりけれ

ひらかずばいかで光ひかりのあらはれむ　こがね花はなさく山やまは
ありとも

158

なかばにてやすらふことのなくもがな　學まなびの道みちのわけ
がたしとて

ゆるされてまなびの窓まどをいづる子こよ　思おもはぬ道みちにふみ
な迷まよひそ

159

いにしへの文ふみの林はやしをわけてこそ　あらたなるよの道みちも
しらるれ

よりそはむひまはなくとも文机ふつくゑの
うへには塵ちりをすゑ
ずもあらなむ

世よの中なかをおもふたびにも思おもふかな わがあやまら
のあ
りやいかにと

たらちねの親おやの心こころをなくさめよ 國くににつとむる暇ひまある
日は

たらちねのみおやの教おしえあらたまの 年としふるまゝに身みに
ぞしみける

思ふ事おもふがまゝに言ひいづる　をさな心やまこと
なるらむ

たらちねのおやの教をまもる子は　まなびの道もまど
はざるらむ

山深くかくるゝ人をむかへても　世を治むべき道をと
はばや

いさがある人を教のおやにして　おほしたてなむやま
となでしこ

たらちねのにはの教はせばけれど　ひろき世にたつも
とゐとぞなる

慕はしとおもふ心やかよひけむ　昔の人ぞゆめに見え
ける

目に見えぬ神にむかひてはちざるは　人の心のまこと
なりけり

めにみえぬかみの心に通ふこそ　ひとの心のまことな
りけり

國民こくたみのわくるちからのあらはれて 道みちてふみちのひら
けゆくかな

たらちねの親おやにつかへてまめなるが 人ひとのまことの始はじり
なりけり

やすくしてなし得えがたきは世よの中なかの 人ひとのひとたるお
こなひにして

世よの中なかにしられていよゝみがゝなむ わが敷島しきしまのやま
とだましひ

萬代にうごかぬものはいにしへの 聖のみよのおきて
なりけり

世の中の人におくれをとりぬべし すゝまむとときに進
まざりせば

暇あればまづこそ思へ戦に たゝれずなりし人はいか
にと

かみつ代の御代のおきてをたがへじと 思ふぞおのが
ねがひなりける

開けゆくときにいよく仰がれぬ 聖の御代のたかき
をしへは

ともすればうきたちやすき世の人の 心の塵をいかで
しづめむ

世を守る神のみたまをあふぐかな 朝ぎよめせし殿に
いでつり

萬代の國のしづめと大空に あふぐは富士のたかねな
りけり

われもまたさらにみが、む曇なき 人の心をかゞみに
はして

國のため高きほまれを得し人の 身をあやまたむこと
なくもがな

千萬の民の力をあつめなば いかなる業も成らむとぞ
思ふ

國のため力つくさむわらはべを 教ふる道にこゝろた
ゆむな